平成30年度 文化遺産総合活用推進事業

飾万津町の祭礼文化

日時

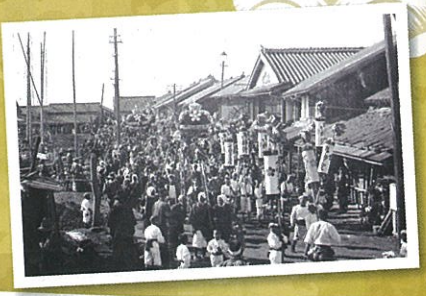
平成30年9月30日(日)
午前8時30分～午後4時
〈雨天決行〉 ※雨天の場合は場所・内容が一部変更となります。

場所

飾磨支所・南保健センター
北細江第二公園（飾磨支所西側）
氏子各町屋台蔵

内容

大屋台の展示（北細江・天神・須加・西細江）
屋台蔵スタンプラリー（各地区屋台蔵一般公開）
飾万津祭礼古記録映写会
飾万津祭礼古写真展



写真監修　飾万津祭礼保存会

文化庁

平成30年度 文化遺産総合活用推進事業
【実施団体】飾万津祭礼保存会

祭礼文化のフェイスブック開設しました!
みなさんの「いいね!」待ってます!
https://www.facebook.com/shikamazu2018/

恵美酒宮天満神社 浜の宮天満宮 秋季例祭

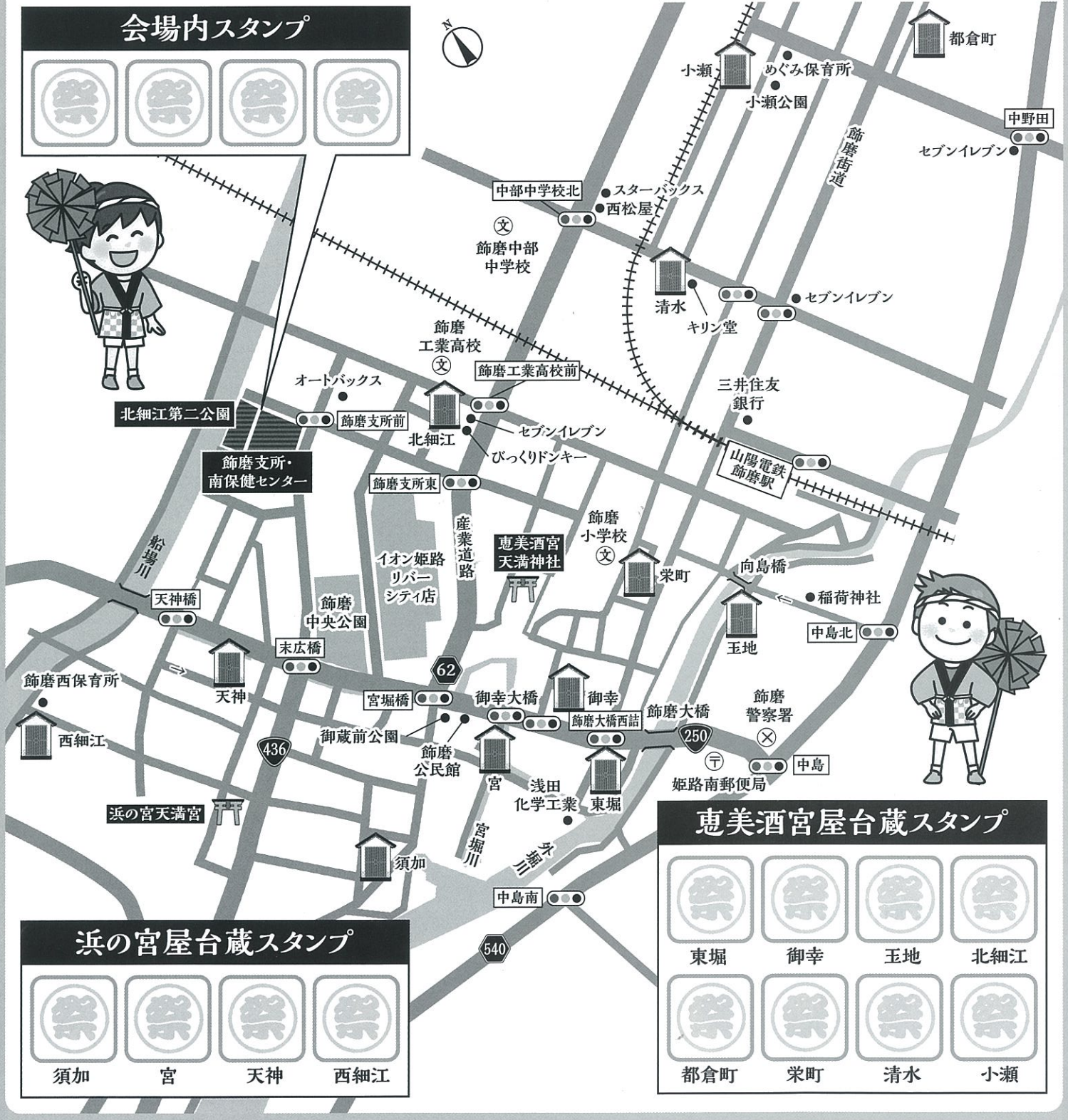
平成30年
10月8日(月)(祝)・9日(火)

「飾磨祭り」で知られる「恵美酒宮天満神社」「浜の宮天満宮」の秋季例祭。毎年10月8日・9日に行われます。
恵美酒宮天満神社の「台場練り」、浜の宮天満宮の「台場差し」は姫路市重要無形民俗文化財に指定されています。

恵美酒宮天満神社　浜の宮天満宮

お楽しみスタンプラリー

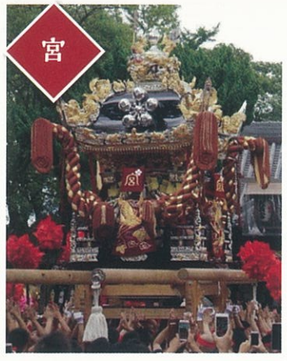
イベント会場・各屋台蔵を巡ってスタンプを集めよう！
スタンプを7個集めると「すてきな」プレゼントがもらえるよ！



文化庁　平成30年度 文化遺産総合活用推進事業

恵美酒宮天満神社秋季例祭

浜の宮天満宮秋季例祭



文化庁
平成30年度
文化遺産総合活用推進事業

写真監修　飾万津祭礼保存会

飾万津の祭礼文化

祭礼日
10月8日（宵宮）
9日（本宮）

飾万津祭礼保存会

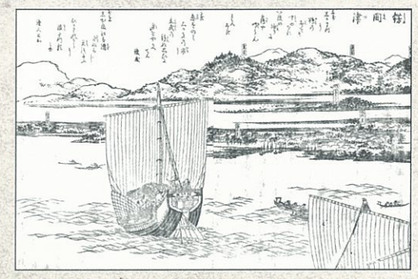
◆飾万津

飾万津は古代から瀬戸内海水運の要衝として「飾磨」には市（いち）がたち、また歌枕の地としても都に聞こえていた。平安時代には飾磨庄（しかまのしょう）という庄園が立庄され、関ヶ原の戦後、播磨の国主となった池田輝政は姫路城の築城とあわせて外港として飾万津を整備したことから港町としての一層の発展がみられた。

輝政は城下から飾万津まで三左衛門堀を開削し、その土砂で向島を築いて御船役所（姫路藩水軍基地）を設置、水路や港湾施設の整備や宮町の天神社（浜の宮）を須加に移設して跡地に米蔵（飾磨御蔵）設置なども行った。元和3年（1617）姫路藩主となった本多忠政は城下西側より飾万津まで船場川舟運を開き、姫路城下と瀬戸内海水運の結節点としての位置が確固たるものとなった。

姫路城外堀に開かれた飾磨街道の街道筋の町場化も進行し、17世紀前半に街道筋と飾万津あわせて20町が成立していたとみられる。奥平松平忠明の時代、飾万津の岡手5町（上町・細江町・下英加町・上英加町・都倉町）と浦手6町（須加町・大町・宮町・東堀町・御幸町・田町）にそれぞれ2人の大年寄が置かれ、飾万津20町は飾万津町奉行の支配下となった。

なかでも飾万津町は藩内西南部の村々の年貢米の回送と御蔵入に重要な役割をもつだけでなく、漁港としての役割や干鰯などの諸商品の取引場としての役割も大きかったが、17世紀半ばにはすでに「湊浅し」といわれ大型帆船は沖合に停泊し「通イ船」で積み荷を湊まで運漕しなければならなかった。文化文政期から河口の浚渫を度々行い、弘化3年（1846）から湛保（船繋場）を築造、翌年完成すると飾万津の町はたいへんな活況を呈したという。



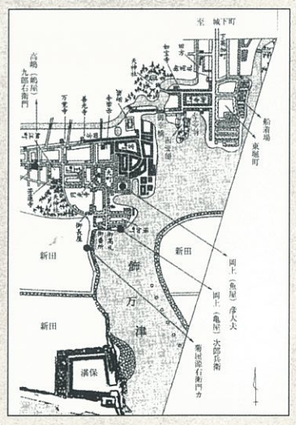
「飾万津沖合に停泊する大型帆船から「通イ船」で運漕する状況（文化元年（1804）「播州名所巡覧図絵」）

◆飾万津祭礼のおこり

江戸時代、岡手5町と浦手6町は、御幸橋をはさんで東側の町が橋東、西側の町が橋西と呼ばれており、伊能忠敬資料館の飾磨津絵図には御幸橋の北に「社 エビス天神」（恵美酒宮天満神社）、スカ（須加）に「天神社」（浜の宮天満宮）が記されており、「飾万津両社」と記される恵美酒宮と浜の宮は、それぞれ橋東と橋西の氏宮の位置にあったとみられる。

正徳4年5月、飾万津は名高き所であるのに、祭礼の時分に神事がないことは嘆かわしいとして、「いざ東西（橋東・橋西）ともに神輿ヲ建立し奉らん」と記されており、恵美酒宮と浜の宮ともに神輿を建立し、祭礼にあたりそれまでなかった神輿の神幸が行われだしたことがわかる。両社ともに神輿建立と神事執行の手続き、神幸式（神輿渡御・還御）の行列次第や警固など「神事始之定」を制定し、華やかな神幸行列と氏子地区が供奉する多彩な練り物という近世祭礼の形ができたようである。

飾万津略図（『姫路市史』第4巻より引用）



正徳4年（1714）以来継承される神輿渡御・還御

浜の宮天満宮神輿（渡御）

恵美酒宮天満神社神輿（還御）

神事始より5年目に、恵美酒宮の神輿は御蔵前まで、浜の宮の神輿は御茶屋まで、御幸橋を越えてそれぞれ神輿の神幸を行うことになった。氏子各町が神幸供奉に趣向を凝らすいわゆる祭礼風流には獅子、田楽、丹鶴（ダンジリ）、鑓笠踊り、人形使い、神輿太鼓、神楽太鼓、幣太鼓、子供練り等があったようであり、享保10年（1725）には飾万津の両社神事が例年ことのほか美々しきことが姫路藩主の上聞に達するところとなり、練り物などの祭礼風流は無用との書付けが出されるに至り、飾万津町の人々がいかに盛大で華麗な祭礼を行っていたかを垣間見ることができる。祭礼行事の執行に際しては現在も計画・進行に際して細心の注意と周到な準備を行っているが、歴史的には故障が生じたこともある。例えば享保7年（1722）に橋西・橋東の丹鶴に関する出入（紛争）が伝えられ、東西の町年寄衆が尽力して和談に導いているが、かかる故障を乗り越え智恵を集積してきたことが、現在の整然とした祭礼執行に繋がっているのである。

◆飾万津祭礼の特色

恵美酒宮天満神社（姫路市飾磨区恵美酒14）と浜の宮天満宮（姫路市飾磨区須加40）の秋季例祭は例年10月8日宵宮、9日本宮が行われ、いずれも姫路市指定重要無形民俗文化財である。

恵美酒宮の氏子地区は、東堀、都倉町、御幸、栄町、玉地、清水、北細江、小瀬の8地区があり、それぞれ子ども練り衆が先導して太鼓屋台を繰り出し、練り子が差し上げた太鼓屋台の泥台（台場）を24人が肩で舁く「台場練り」という風流を行う。

浜の宮の氏子地区は、須加、宮、天神、大浜、川内細江、西細江、中細江、港、南細江、松陽台の10地区があり、港、中細江、松陽台のほかは、それぞれ子ども練り衆が先導して太鼓屋台を繰り出し、須加、宮、天神、西細江の太鼓屋台は練り子が差し上げた太鼓屋台の泥台（台場）を24人が手で差す「台場差し」という風流を行う。宮地区には大傘と獅子ダンジリが残る。

豪快で華麗な飾万津の祭礼風流は、自治会、青年会、青年団、女子青年団、中老会、老人会、婦人部、子ども会など各氏子地区によって組織や名称は異なるが、様々な組織が役割分担と連携を行ってはじめて運行されるものであり、江戸時代以来、地域住民が支え継承する祭礼にほかならない。

◆飾万津祭礼の流れ

祭礼に掛かる行事は新年早々より始まり、3月までにはいずれも新役員が決まり、打ち合わせや引き継ぎが行われる。梅雨明け頃から祭礼準備は本格化し、祭礼用具の虫干しや点検整備を行う。盆過ぎ頃から氏子各地区内の諸組織の会合・打ち合わせが始動、さらに氏子各地区間の連絡調整が行われ、恵美酒宮では8月下旬自治会長・宮総代会、申し合わせ会、浜の宮では9月中旬に交渉会があり秋季例祭に向け本格始動となる。また太鼓・伊勢音頭・シデ作りなど子どもたちへの継承活動も始まる。9月下旬になると提灯、幟、大道輿などが設置され祭礼の空気が色濃く漂うようになる。10月1日には各氏子地区で帳場開きがあり毎晩子どもたちが地区内を巡回して大人たちの呼び込みを行う地区もある。10月7日は各地区大ならしや屋台練り合わせなどがあり、祭礼当日に向けた意気込みが伝わる。

10月8日宵宮の明け方、触れ太鼓で祭礼の開始が伝えられ、かつてはその音を聞いて各戸は提灯に火をともしていたという。各地区は屋台蔵から太鼓屋台の蔵出しと出立式を行って町内練りを行い宮入りがある。台場練りは宮入りの際や随所で行われ、台場差しは、境内と御旅所のみで行われる。

10月9日本宮、蔵出しと出立式のあと恵美酒宮氏子地区は山電飾磨駅北側に全太鼓屋台が集結し練り合わせと台場練りを行い宮入りとなる。浜の宮氏子地区は浜の宮東側の道に集結、屋台練り合わせを行いながら鳥居に至り宮地区の大傘と獅子ダンジリが先導して宮入りとなる。それぞれ神事が執り行われ、恵美酒宮は浜先御旅所に、浜の宮は元宮の地に神輿渡御が行われる。恵美酒宮は都倉町が当番町のとき本神事といって正徳4年の例にならい都倉町まで神輿渡御がある。浜先御旅所への渡御は享保11年（1726）世上凶作・困窮を要因とした社内神幸を初例とするようである。浜の宮は慶長年間の飾万津整備による藩の御蔵建設で宮から須加へ移転したことで元宮を御旅所として神輿渡御、宮地区の獅子舞奉納と台場差しが行われている。神輿還御ののち勇壮な屋台練り合わせ、台場練り、台場差しなどの風流があり各地区宮出しとなり蔵入れをもって終了、翌日帳破りが行われて祭礼の締めくくりとなる。